

## The Canterbury Talesにおける「神」の迂言的表現 ： L. D. Benson の所説に関連して

浦田, 和幸  
九州大学教養部

<https://doi.org/10.15017/6796253>

---

出版情報：言語科学. 23, pp.75-87, 1988-02-10. 九州大学教養部言語研究会  
バージョン：  
権利関係：

The Canterbury Tales における「神」の迂言的表現

—— L. D. Benson の所説に関連して —— ※

浦田 和幸

1. 序

神に対する言及は、宗教作品のみならず中世英文学全般にわたって数多く見られる。その際、God などの直接的表現によることが最も一般的であるが、関係詞節を伴う迂言的表現 (e. g. he that on hyghe syttes) を用いて神を指し示す例も見受けられる。無論、この種の神のパラフレーズはかなり限られたものではある。しかしながら、この類いの表現が、Chaucer とほぼ同時代の頭韻詩 Gawain 詩群および St. Erkenwald (以下、Erkenwald) の作者説をめぐり、長きにわたって学界の注目を集めてきたという経緯がある。

まず、その代表的な例を見てみよう。Clark (1950: p. 235) は、Gawain 詩群と Erkenwald における神のパラフレーズを、先行詞のタイプに従って次の (i) (ii) (iii) に分類している。(問題となる箇所を明確にするため、以下、引用例中の先行詞および関係詞節には下線を施すことにする。)

(i) “Lord,” “Prince,” “Sovereign,” etc.

(1) Bot I louue that ilk Lorde that the lyfte haldez (Gawain 1256)

(ii) 人称代名詞

(2) Bot honoured he not Hym that in heuen wonies (Cleanness 1340)

(iii) “人”を意味する語

(3) That Wywe I worchyp, iwysse, that wrought alle thinges

(Patience 206)

この種の表現が Gawain 詩群に特徴的であるということは Knigge (1885)<sup>1</sup> の指摘するところであったが、それを Menner (1920) はさらに一歩進めて、関係詞節を用いた神の迂言法を Gawain 詩群の文体的特徴と見なし、同一作者説を裏付ける根拠の1つに数える。同種の表現は Erkenwald にも現れるが、その点については Savage (1926)、Oakden (1935) らが後に指摘した通りである。ところで、これらの研究はいずれも、(1) から (3) に代表される神のパ

ラフレーズを Gawain 詩群あるいはまた Erkenwald を除く他のME頭韻詩ではごく稀であると考えており、さらに、その論証の中で脚韻詩についてはいっさい触れていない。その結果、ややもすれば、この種の表現は脚韻詩にはまったく例のない、きわめて特殊な言い回しであるという印象を与えがちである。ところが、Benson (1965) は、他のME頭韻詩さらには脚韻詩をも射程に入れた上で、より広い視野から再度この問題を取り上げている。彼の論考のうち拙論に大きくかかわる箇所を下に引用しておく。

The Gawain-poet, however, was not the only poet to invent and use frequently constructions like this. Periphrases as elaborate and as numerous as those in the Cotton Nero manuscript are to be found throughout Middle English alliterative verse. Indeed, the kind of periphrasis that appears most frequently in Erkenwald—a pronoun plus a relative clause—is quite common even in nonalliterative verse. Chaucer himself uses the construction occasionally—"For his love that dyde upon a tree" (Second Nun's Tale, 138). In the romances it is even more common. The tail-rhyme romance Amis and Amiloun, for example, contains at least a dozen of these constructions, including some obvious formulas that also appear in alliterative verse:

Bi him that ous wrought. (l. 625)

("Bi him that vs wrought," Wm. of Pal., 3133, 4129; "the Wywe that al wroght," Pur., 280; God that al wroughte," Piers, C, XXXI, 248; cf. "Bi him that me bought," Wm. of Pal., 2528, R. Col., 180; "By hym that me made," Piers, C, XVI, 158.)

For him that dyed on rode. (ll. 592, 820, etc.)

("The renk that one the rode dyede," MA. 3217; "Hym that raughte on rode," Piers, C, V, 179; "For him that rest on the rode," Awnt. Arth., 317) (p. 400)

このことより、従来 Gawain 詩群の特徴と考えられてきた神のパラフレーズがME頭韻詩全般に見られるばかりか、先行詞が人称代名詞であるタイプ "he that..." にいたっては、脚韻詩においても普通に用いられていることが明らかになった。さらに、この表現は Chaucer にも散見され、ロマンス作品ではより一般的であるとも述べているが、これは注目に値する指摘であると言えよう。実際のところ、神を指し示すこの種の迂言的表現が Chaucer の作品

中ことさら大きな意味を持つとは考えがたい。しかし、当時を代表する詩人 Chaucer の用例を子細に検討することにより、従来 Gawain 詩群に特有だとされてきたこの類いの表現がどの程度特有であるか、あるいはそうではないのか、という問題に光を投げかけることができるように思われる。

Chaucer におけるこの種の表現を具体的に考察する前に、Benson (1965) の指摘したもう1つのジャンル、即ち、脚韻ロマンスに現れる用例をまず検討し、Gawain 詩群および Erkenwald の作者説について考え直す際の手がかりとしたい。

## 2. ロマンズ

上述の Benson (1965: p. 400) は、テイル・ライム・ロマンスの Amis and Amiloun<sup>2</sup> に起こる2つの表現、“Bi him that ous wroght” と “For him that dyed on rode” を formula<sup>3</sup> として位置付ける。一般にMEロマンスは formulaic な表現を多用する傾向を示しているが、裏を返せば、そのような傾向を持つ作品中繰り返し用いられる表現は、当時の韻文においてある程度確立した言い回しであったと予想される。そこで、関係詞節を伴う神のパラフレーズに関しどの程度の表現が formula と見なしうるかを探る手がかりとして、他のMEロマンス作品に現れる用例について概観しておくことにする<sup>4</sup>。調査した作品は、Amis and Amiloun 同様テイル・ライム・ロマンスに属し、Mills 編集の Six Middle English Romances に収録されている以下の作品である。

<u>The Sege of Melayne</u>	(1600 lines. ?a1400. N.)
<u>Emaré</u>	(1035 lines. c1400. EMid.)
<u>Octavian</u>	(1791 lines. c1350. N.)
<u>Sir Isumbras</u>	(798 lines. a1350. N.)
<u>Sir Gowther</u>	(750 lines. ?c1400. EMid.)
<u>Sir Amadace</u>	(840 lines. a1400. WMid.)

収集された例は合計12例である。それを先行詞のタイプに従って分類すると、次のようになる。

- |            |    |
|------------|----|
| (i) “king” | 1  |
| (ii) 人称代名詞 | 11 |

人称代名詞が先行詞となるタイプが圧倒的である。Gawain 詩群で比較的良好に見られる (iii) のタイプがまったくない点、Gawain 詩群と異なっている。

次にこの 12 例を関係詞節の意味内容に基づいて分類すると、以下のようになる。

## (a) [9 occurrences]

(1) For his love that dyed on rode (Sir Isumbras 272)(2) For his lufe that deet on tree (Sir Amadace 712)(3) For his love that dyed on rode,  
And with his blode us bowghte (Sir Isumbras 233-4)(4) Now think on him that deit on rode,  
That for us sched his precius blode,  
For the and monkynd alle (Sir Amadace 445-7)

## (b) [2 occurrences]

(5) For he that schope bothe sunne and mone (Sir Amadace 455)(6) Speke of that ryghtwes kyng  
That made both see and sonde (Emaré 17-8)

## (c) [1 occurrence]

(7) To hym that all may welde (Octavian 249)

(a) は十字架でのキリストの死を表しており、このタイプは 12 例中 9 例と最も多い。代表的なものは (1) (2) であるが、(3) (4) のごとく 2 行以上に及ぶ場合もある。次に (b) は万物の創造者としての神の特徴をとらえ、また (c) では、“すべてをしろしめす” という描写がなされている。以上、(a) キリストの贖罪、(b) 創造者、(c) 統治者 にまつわる表現が我々の資料において収集された次第である。このうち (a) に属する例は、Benson (1965: p. 400) が formula と考える “For him that dyed on rode” と同一線上にあり、他方 (b) は “Bi him that ous wrought” と概念的に類似している。ただし、(c) については Benson (1965) に言及が見られず、またサンプルとして選んだ作品中 1 例しか見当たらないものの、(a) から (c) のタイプは程度の差こそあれ、当時の韻文において一応確立した表現であったと想像される。以下、このことを念頭に置いて論を進めていく。

### 3. The Canterbury Tales

既に触れたように、Benson (1965: p. 400) は Chaucer からの例として “For his love that dyde upon a tree” を引き、従来 Gawain 詩群の特徴とされてきた神のパラフレーズは時折 Chaucer にも現れると述べているが、これは単なる指摘にとどまり、どのような表現がどの程度用いられるかなど、その詳細については明らかにされていない。本節では Chaucer の用例を実際に検証するため、The Canterbury Tales (以下、CT) における表現を抽出し、それについて考察を加えることにする。なお、Chaucer の用例を調べる資料として CT を選んだのは、CT に含まれる作品のジャンル、主題は多岐にわたり、そのため偏りなく例を収集することができると思ったからである。

まず韻文の方から見ていくことにするが、該当する表現は14例である。それを先行詞によって分類すると、次のような分布を示している。

(i) “Lord,” “Father”	4
(ii) 人称代名詞	10
(iii) “人”を意味する語	0

前節で考察したテイル・ライム・ロマンスにおける場合と同様、人称代名詞を先行詞とする例が最も多く、先行詞の位置に“人”を意味する語が立つ例はまったくない。

次に、関係詞節内の表現について考察する。ここでは、収集できた14例すべてを、関係詞節の担う意味によって分類してある<sup>5</sup>。

#### (a) [4 occurrences]

- (1) And for his love that dyde upon a tree (SN 138)
- (2) Of thilke Fader—blessed moote he be!—  
That for us deyde upon a croys of tree (C1 557-8)
- (3) But by that ilke Lord that for us bledde (Sh 178)
- (4) But he that starf for our redempcioun  
And boond Sathan (and yet lith ther he lay) (ML 633-4)

#### (b) [2 occurrences]

- (5) No, by that Lord, quod she, that maked me (Fk1 1000)
- (6) By hym that made water, erthe, and air (Mch 1558)

- (c) [1 occurrence]  
 (7) And rebel is to hym that al may gye (Kn 3046)
- (d) [1 occurrence]  
 (8) For by that Lord that sit in hevene above (Mch 2162)
- (e) [2 occurrences]  
 (9) Now help, Thomas, for hym that harwed helle (Sum 2107)  
 (10) To child ne wyf, by hym that harwed helle (Mil 3512)
- (f) [2 occurrences]  
 (11) For He that is the formere principal (Phs 19)  
 (12) He that is lord of Fortune be thy steere (ML 448)
- (g) [2 occurrences]  
 (13) Wel may men knowe it was no wight but he  
That kepte peple Ebrayk fro hir drenchyng,  
With drye feet throughtout the see passyng (ML 488-90)  
 (14) He that me kepte fro the false blame  
While I was on the lond amonges yow (ML 827-8)

(a) に挙げた例はキリストの死にまつわる表現である。(1) は formula 通りの形をしており、(2)(3) は、韻律、脚韻の要請もあって、(1) に若干手を加えた言い回しとなっている。ところが、(4) に関して見ると、第1行は上記(1) から(3) と概念的には同じであるものの、言葉遣いの点でやや隔たりが感じられ、さらに次行において“サタンを縛りつけた”という描写も付け加えられ、総じて例文(4)は Chaucer のオリジナリティーを彷彿させる。なお、ここでサタンに対する言及が見られるのは、Man of Law's Tale 中、サタンが非の打ちどころのない女性 Custance を誘惑しようともくろんでいる状況、つまり、作品の流れと密接な関係にあると言えよう。

(b) は万物の創造者としての神を言い表している。(5) は Benson (1965: p. 400) の “Bi him that ous wrought” とその軌を一にし、また(6) は第2節の(b) で見た他の ME ロマンズ作品からの例とパラレルな関係にある。

(c) では、“すべてをお導きになる”という表現がなされている。厳密には “gye”, “welde” という語レベルの違いがあるものの、前節の(c) に挙げた例とほぼ同一線上にある。

以上、(4) の第2行を除き、(a) から(c) の各例には調査した他の ME ロマンズ作品に対応例が見つかる。言い換えれば、これらは formula であるか、あるいは、formula を若干変形したものであると考えられる。

次に、(d) 以下の例について見てみよう。これらは、サンプルとして調べた他のロマンス作品にその類似表現が見当たらないものばかりである。

(d) における“天にましますお方”という言い回しは、ごく一般的な概念を表現している。また、先行詞として“God”が用いられ厳密には迂言法と言えないまでも、類似表現として CT に次のような用例もある。

And seyde thus: By God that sit above (Kn 1599)

And God, that sitteth heighe in magestee (Rv 4322)

従って、(d) のタイプの表現も当時の formula であったと考えられそうである。

(e) は、いわゆる“Harrowing of Hell”を持ち出し、それによってキリストを指し示している。なお、“Harrowing of Hell”そのものを当時の人々がどのように受けとめていたかについては、次の引用が参考になろう。これは、例文(10)に関して The Riverside Chaucer の後注で述べられている説明である。

The story of the Harrowing of Hell (from the apocryphal Gospel of Nicodemus . . . ) was immensely popular in the Middle ages . . . .

John would have been familiar with it from wall-paintings and from mystery-plays.

このことより、“Harrowing of Hell”にまつわる説自体、当時の民衆の間に流布していたことがわかる。また、同種の表現はME頭韻ロマンスの William of Palerne でも用いられている。

He that heried helle fram harm him save (3725)

以上の2点を考え併せると、(e) のタイプも当時の formula であったと見なすことができるであろう。

(f) に挙げた例は関係詞節内の構造が他と異なり、Be 動詞が用いられている。ここでは神の特性のうち作品の流れに添う一面、つまり、(11) では“造物主”、(12) においては“運命の神”としての一面が強調される。もっとも、単に“the formere principal”, “lord of Fortune”とだけ記していたとしても、伝える意味に決定的な違いは生じないであろう。しかるに(11)(12) のご

とき表現が行われる理由として、まずは詩行を満たすという versification 上の要請が考えられ、さらに表現効果の点では、このような言い回しを用いることにより、文脈に添う神の一側面をいっそう鮮やかに描こうとしたということが考えられる。しかしながら、ここに現れる “the formere principal” および “lord of Fortune” は一般的な概念であり、(11)(12)において、ことさら詩人 Chaucer のオリジナリティーが感じられるわけではない。

最後に (g) の 2 例について考察する。これらは既に眺めた例とはかなり性質を異にし、(4) の第 2 行と同じく詩人のオリジナリティーが発揮され、かつ、文脈と密接に結びついた用いられ方をしている。ともに Man of Law's Tale からの例である。(13) は、“国外追放の命を受けただ 1 人舵のない小船に乗せられ大海原を流浪する Custance、彼女が溺れずにすんだのは一体誰のおかげであろうか” という問いかけ (“Who kepte hire fro the drenchyng in the see?”) に対する答えである。一方、(14) は、再び大海をさすらう憂き目にあった彼女が発する言葉である。“陸上で皆さんと暮らしていましたおり、私を無実の罪からお救い下さったお方が、今度は海の上で私をお護り下さいますでしょう” と。いずれも formula の域を越えた表現で、ここでは詩人の技巧が感じられる。

以上、CT に現れる例を概観してきたが、作品の主題およびジャンルに関する点で、次の 2 点を簡単に指摘しておく。

第 1 に、14 例中、4 例 ((4), (12), (13), (14)) が Man of Law's Tale からの引用であることに注目したい。Custance の受難、キリストとマリアの奇跡を描くこの物語には、全般的に後 2 者に対する言及が多く、しかもその表現は変化に富み作品の雰囲気盛り上げるのに一役かっている。その変の事情については、榎井 (1976: p. 174) が参考になろう。

..... チョーサーがこの物語りの原点であるアングロ・ノルマン語で書かれたトリヴェの作品には興味を持っていた。

それは、民間伝承に起源をもつ、奇蹟に満ちた物語である。不可能なことがキリストやマリアの信仰によって可能にされる敬虔の物語である。(中略) チョーサーはこの物語をはじめの粗い翻訳から後になって全力をあげて推敲し丹念につくりあげたのであった。その想像力の方向は、コンスタンスの敬虔、純潔、忍耐、憐れみの効果を高めるといふ方向にはたらいいる。修辭的な技巧として、キリストやマリアへの敬虔、熱烈な祈りの表現や語り手の呼びかけの表現がいたるところに鏤められ、感動的である

.....

第2点として、作品のジャンルとのかかわりについて見ておきたい。CTの各作品の属するジャンルを明確に区別することははなはだ困難であるが、目安とするため、Pearsall (1985) を参照しつつ、(1) から (14) の例が現れる各作品を以下のごとくジャンル別に分類してみた。

Religious Tales	<u>Second Nun's Tale</u> , <u>Man of Law's Tale</u> , <u>Clerk's Tale</u> , <u>Physician's Tale</u>
Romances	<u>Knight's Tale</u> , <u>Franklin's Tale</u>
Comic Tales	<u>Miller's Tale</u> , <u>Merchant's Tale</u> , <u>Shipman's Tale</u> , <u>Summoner's Tale</u>

これは、関係詞節を伴う神の迂言的表現が各ジャンルともに見いだされることを示しており、Religious Tales や Romances のみならず、Comic Tales にさえ現れることが確認できる。ちなみに、“Harrowing of Hell” に基づく (e) のタイプは、わずかに Comic Tales においてのみ用いられているにすぎない。これだけの例からにわかに結論を下すことは不可能であるが、詩人 Chaucer はこの種の表現を Religious Tales や Romances において使用することに、なんらかのためらいを感じていたのかもしれない。

以上、CT の韻文に起こる例について論じてきた。要約すれば、Chaucer は神を指し示す際、第2節で触れたMEロマンス作品に生起する言い回しを含め、formula、あるいは、formula と考える表現を用い、さらには作品の流れに添った技巧的な表現を試みる場合もある、ということになる。

さて、ここで散文での用法について簡単に触れておく必要がある。迂言法と見なしうる例は3例現れる。それらに関係詞節の意味内容に基づいて分類すると、(a) キリストの贖罪、(b) “天にまします”のごとく2つに分かれ、いずれも韻文に類似表現が見いだされるものばかりである。ゆえに、関係詞節を用いて迂言的に神を指し示す表現法が、一人韻文にのみ限られた手段でないことは明らかである。

- (a) (1) . . . he hath wrathed and agilt hym that boghte hym, that with his precious blood hath delivered us fro the bondes of synne, and fro the crueltee of the devel, and fro the peynes of helle

(Pars 132)

- (2) thurgh the benigne grace of hym that is kyng of kynges and preest  
over alle preestes, that boghte us with the precious blood of his  
herte (Chaucer's Retraction 1091)
- (d) (3) . . . glorifie youre fader that is in hevene (Pars 1037)

#### 4. Gawain 詩群との比較

関係詞節を用いた神のパラフレーズに関しては Gawain 詩群の各作品間でも相違が見られ、改めて検証し直す必要性を感じる。しかし、本節ではこの問題に深く立ち入らず、従来主にME頭韻詩の中だけで論じられてきたこの種の表現がどの程度CTに現れるかを確認し、Gawain 詩群および Erkenwald の作者説を考える際の一助としたい。

先行詞については Patience, Cleanness, Gawain における場合と異なり、CTでは“人”を意味する語を用いる例はまったく見当たらないが、これは既に指摘した通りである。

次に、関係詞節の表現に目を向けてみよう。Gawain 詩群に現れる例のうち、次のような表現は類似例がCTにも見られる。

- (a) (1) Bot He on rode that bloody dyed,  
Delffully thurgh hondez thryght (Pearl 705-6)
- (b) (2) I wot neuer where thou wonyes, by Him that me wroght (Gawain 399)
- (3) That Wywe I worchyp, iwysse, that wroght alle thynges,  
Alle the worlde with the welkyn, the wynde and the sternes,  
And alle that wonez ther withinne, at a worde one  
(Patience 206-8)
- (c) (4) He is so clene in his courte, the Kyng that al weldez  
(Cleanness 17)
- (d) (5) Bot he watz sokored by that Syre that syttes so highe  
(Patience 261)
- (6) Bot honoured he not Hym that in heuen wonies (Cleanness 1340)

上記の例、即ち、(a) キリストの十字架での死、(b) 万物の創造者、(c) 統治者、(d) “天にまします” の観点から述べる迂言的表現は、当時の韻文における formula あるいはその変形と考えられ、ことさら Gawain 詩群の文体的

特徴とは思えない。また、特定の文脈の中で意味を持つ次のような表現法も、Gawain 詩人の専売特許とは言えない。

(g) (7) Tyl thay had tythyng fro the Tolke that tyned hem therinne

(Cleanness 498)

これは、前節に挙げた CT の例のうち、(14) と似通った表現法である。

以上のことより、従来 Gawain 詩群の作者説を議論する根拠として取り上げられ、Gawain 詩群の文体的特徴と見なされてきた神のパラフレーズの中には、実は CT においてすら用いられるものが少なくないことを指摘することができた。ちなみに、CT には、Gawain 詩群に現れない言い回しもある。それは、前節の (e) (f) に類するタイプである。

## 5. 結語

Gawain 詩群の同一作者説を主張するにあたり、果たして神のパラフレーズがその有力な根拠となりうるのであろうか。古くかつ新しいこの問題には、いまだ議論の余地が多分に残されていると言えよう。小論は Benson (1965) に端を発し、ME ロマンズにおける表現を概観した後、CT の用例について考察してきた。その結果、まず、関係詞節を伴う迂言法そのものは CT にも 14 例見いだされ、これが Gawain 詩群のみならず、脚韻詩でも用いられる表現法であることが改めて確認された。さらに、関係詞節の意味内容に注目すると、収集しえた例の大半が Gawain 詩群における例と共通しており、少なくともその共通する例については、当時の formula であったと考えられる。従って、両者に見られるこれらの表現をことさら Gawain 詩群の文体的特徴と見なし、同一作者説を唱える際の根拠として挙げることには大きな疑問を感ずる次第である。無論、CT において見られぬ表現も Gawain 詩群では用いられており、また、先行詞の点で両者に多少の差異があることも事実である。さらに広い視野から Gawain 詩群および Erkenwald における神のパラフレーズを見直す必要があることは明白であるが、それについては稿を改め、小論で考察した脚韻詩での表現を念頭に置きつつ、Gawain 詩群と他の ME 頭韻詩における用例とを綿密に比較し論ずることとする。

## NOTES

※ 小論は、日本英文学会第40回九州支部大会（1987年11月8日、於 北九州大学）の「チョーサーの言語と文体」と題するシンポジウムで発表した原稿に加筆したものである。この場を借りて、司会の田島松二先生（九州大学）ならびに討論者の鈴木榮一先生（東北学院大学）に感謝の意を表す。

また、小論では便宜上“thorn”は“th”で、“yogh”は現れる環境に応じて“y, gh, w”で表記することをあらかじめお断りしておく。

1. 未見。 Cf. Menner (1920: xvi - xvii)
2. Amis and Amiloun の総行数、作品制作推定年代、方言は次の通りである。 2508 lines. ?c1300. EMid.
3. ここでの formula は“oral formulaic theory”におけるそれとは異なり、厳密には stereotyped phrase と呼ばねばならぬが、小論では便宜上 Benson (1965) にならい formula という術語を用いることにする。
4. 一般にロマンスでは、神に対する言及がしばしばなされることを付記しておく。
5. 引用文中の出典略号は以下の通り。

Cl: The Clerk's Tale

Fkl: The Franklin's Tale

Kn: The Knight's Tale

Mch: The Merchant's Tale

Mil: The Miller's Tale

ML: The Man of Law's Tale

Phs: The Physician's Tale

Sh: The Shipman's Tale

SN: The Second Nun's Tale

Sum: The Summoner's Tale

## BIBLIOGRAPHY

## (a) Primary Sources

- Andrew, M. and R. Waldron, ed. 1978. The Poems of the Pearl Manuscript: Pearl, Cleanness, Patience, Sir Gawain and the Green Knight. London: Edward Arnold.
- Benson, L. D., ed. 1987. The Riverside Chaucer. 3rd. ed. Boston: Houghton Mifflin.
- Mills, M., ed. 1973. Six Middle English Romances. London: Dent.
- Savage, H. L., ed. 1926. St. Erkenwald: A Middle English Poem. New Haven: Yale Univ. Press.

## (b) Secondary Sources

- Benson, L. D. 1965. "The Authorship of St. Erkenwald". JEGP. 64. 393-405.
- Clark, J. W. 1950. "Paraphrases for 'God' in the Poems Attributed to 'The Gawain-Poet'". MLN. 65. 232-6.
- Knigge, F. 1885. "Die Sprache des Dichters von Sir Gawain and the Green Knight der sogenannten Early English Alliterative Poems, und De Erkenwalde". Doctoral dissertation, Univ. of Marburg.
- 榊井迪夫 1976 『チヨースーの世界』 東京: 岩波書店
- Menner, R. J. 1920. "Introduction" to his Purity: A Middle English Poem. New Haven: Yale Univ. Press.
- Oakden, J. P. 1935. Alliterative Poetry in Middle English: A Survey of the Traditions. Manchester: Manchester Univ. Press.
- Pearsall, D. 1985. The Canterbury Tales. London: George Allen & Unwin.
- Savage, H. L. 1926. "Introduction" to his St. Erkenwald: A Middle English Poem. New Haven: Yale Univ. Press.